

[生徒指導]

不登校解消を実現するための支援の研究

- 自己理解を促し、目標設定と自己決定を軸にした実践を通して -

森 智史*

1 問題の所在

(1) 今日の課題から

文部科学省の学校基本調査(2014)によれば、平成25年度の長期欠席者(30日以上欠席者)のうち、「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校で24,175人、中学校で95,181人であった。前年度と比較すると、小学校では約3千人増加、中学校では約4千人増加となっている。新潟県においても、不登校の児童数は多く、小学校では前年度より62人増加して407人、中学校でも44人増加して1,698人であった。不登校の未然防止や解消は、全国的にも新潟県内においても、大きな課題となっている。

(2) 児童の実態から

新しい学校に赴任して担任することとなった5年生の学級では、前年度欠席日数が45日の女子児童、A児がいた。A児は1年生の頃から毎年欠席日数が増えてきており、2年生の頃から年間欠席日数が30日を超えている不登校児童である(表1)。体調不良を訴えて欠席することが多いが、明確な理由ではない場合がほとんどである。苦手な行事や活動、初めて経験することがある日は欠席する機会が多い。また、冬場に欠席日数が多くなっている。

表1 A児の4年間の出席状況

	授業日数	出席停止・ 忌引等の日数	出席しなければ ならない日数	欠席日数	出席日数
1年	201	3	198	13	185
2年	203	5	198	31	167
3年	203	0	203	41	162
4年	203	0	203	45	158

A児の姉は高校を中退し、中学生の兄は不登校で、どちらも家庭で過ごす時間が長い。両親は定職に就かず、家庭は生活保護を受けている。母親は、A児が登校を渋ると、何かと理由をつけてすぐに欠席させてしまう。これまで、担任が登校を促すと母親が激昂することもあり、学校からの働きかけや家庭訪問等を拒絶する母親に対して、担任が具体的な手立てを講じることが難しい状況であった。A児が不登校であるのは、家族全員が家庭で過ごす時間が長い家庭環境の中で、学校に行きたくないと母親に訴えればいつでも欠席できるという状況が要因の一つだと捉えられる。家庭環境が厳しく、母親への働きかけが困難な場合であっても、A児の不登校を解消するためには、本人への働きかけや具体的な取組が急務であると考えた。

(3) 先行研究から

三浦(2014)は、既に不登校(不登校傾向)となっている児童生徒本人が対策の話し合いの場にはいないケースがあることを疑問視し、「本人参加型不登校改善会議」を実施しながら「本人の自己理解と自己決定」をさせることで、劇的な改善をもたらすことを実証してきた。気の向くままに欠席を繰り返すA児に対する支援においても、本人が自分の現状を認識し、自分で目標設定をすることに、不登校解消の可能性を見出せる。一方、三浦は、「本人参加型不登校改善会議」において、本人だけではなく、本人を取り巻く関係者が一堂に会することの重要性を説いているが、登校刺激や相談に過剰な反応を見せるA児の母親の実態を考慮すると、今回のようなケースでは、いかにA児本人に積極的に働きかけ、意識の変容を促すことができるかが不登校解消の鍵を握ると考えた。

* 柏崎市立比角小学校

また、高橋（2009）は、不登校児童に対する「メンタルフレンド」の考え方に注目し、教師が指導する立場から、より一歩児童に近づいた関係を築き、ステップを踏んで具体的な取組を設定することの重要性を明らかにした。A児のようなケースにおいては、本人への積極的な働きかけが支援の中心になるため、A児が気軽に自分の思いを話したり、担任のアドバイスに素直に耳を傾けたりするような間柄になることが重要である。そのためにも、教育者と被教育者という関係だけではなく、メンタルフレンド的な存在としてA児に寄り添い、A児と目標を共有したり、具体的な取組を話し合ったりする関係の中で支援を進める必要があると考えた。

そこで、本研究では、これらの考え方をもとに、不登校児童A児本人が自分の現状を認識したうえで目標を設定し、そのための具体的な取組を担任と話し合いながら自己決定していくことで、A児がどのように変容していくかを明らかにする。

2 研究の目的

家庭環境が厳しい不登校児童に対して、不登校を解消するために、本人への働きかけとして自己理解を促し、「目標設定」と「自己決定」を軸にした支援をしていくことの有効性を明らかにする。

3 研究の内容・方法

(1) 実践の構想

A児が継続的に学校に登校できるように、「目標設定」と「自己決定」を軸にしながら、以下のような取組を段階的に構想した。

- ①不登校の定義を説明し、本人に目標を設定させる。
- ②選択肢を与える。
- ③本人の不安を取り除く。
- ④登校状況を可視化する。

(2) 検証方法

- ①担任と本人との面談や会話における発話を「会話記録ノート」に記録し、その中から、継続的な登校や不登校の解消につながる場面を抽出し、分析考察する（写真1）。
- ②年間欠席日数や月別欠席日数、登校状況等を前年度と比較し、変化とその要因を分析考察する。

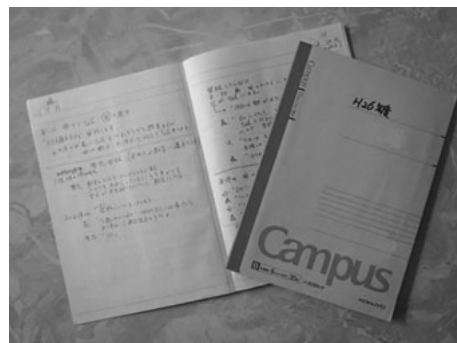


写真1 A児との会話記録ノート

4 実践の結果と分析・考察

(1) 不登校の定義を説明し、本人に目標を設定させる。(10月)

- ① これまでの欠席状況を確認し、不登校の定義を説明する。

A児は5年生になっても、4年生の頃までと同じような理由で出席と欠席を繰り返していた。前期が終了した時点で、欠席日数は16日で、そのうち9月以降の欠席日数が11日であった。冬場に欠席日数が増えていた過去の状況を考えると、このまま何の手立ても講じなければ、単純に計算して年間欠席日数が30日を超えることが予想された。そこで、後期に入って初めて欠席をした日（欠席17日目）の翌日の放課後、A児と2人で面談を行った。

〈10月24日（金）会話記録〉

T：最近欠席が多いけど、体調は大丈夫？学校に登校していない分、授業で分からないところはない？

A：今は大丈夫。

T：それならよかった。でも、Aさん、昨年までも欠席が多かったみたいだね。先生、Aさんのことが心配で、昨年までの様子を調べさせてもらったんだけど、昨年、自分が何日欠席したか知っている？

A：・・・。

T：昨年は45日欠席しているよ。この数字を聞いて、Aさん、どう思う？

A：多いと思う。

T：先生もそう思ったんだ。実はね、一年間で欠席日数が30日以上になってしまう子どものことを、先生たちは「不

「登校」と言って、「この子はこの一年間、学校になかなか来られなかった」というふうに見ているんだよ。「不登校」という言葉は聞いたことある？

A：うん。

T：じゃあ、Aさんの場合はどうなると思う？

A：不登校？

T：残念ながらそうだね。去年は30日を超えてしまったからね。実は、Aさんは、2年生の頃から30日を超えてしまっているから、2年生の頃から「不登校」なんだよ。知っていた？

A：知らなかった。

T：でも、今年はまだ10月だよ。5年生になってから今日まで、何日欠席しているか分かる？

A：・・・。

T：昨日の欠席で17日。だから、Aさん、今年はまだ「不登校」ではないよ。あと13日欠席してしまうと、合計30日になって「不登校」になるけど、あと12日欠席しても合計29日だから、「不登校」にはならないんだよ。

A：そうなんだ。

自分の気の向くままに欠席をすることが多かったA児は、自分の過去4年間の欠席状況や自分の立場を理解していなかった。欠席状況を確認し、不登校の定義を教えたことで、A児は自分の置かれている状況を理解したり、これまで不登校であったことを自覚したりすることができた。また、今年度のこれまでの欠席日数を確認したことで、今後の状況によっては、不登校を解消することができるかもしれないという可能性を示すことができた。

② 不登校の不利益を説明する。

これまでの欠席状況を確認し、不登校の定義を説明した後、不登校がもたらす影響について考えさせ、将来の見通しをもたせた。

〈10月27日（月）会話記録〉

T：Aさん、あと1年半で小学校を卒業するけど、小学校を卒業したらどこに行くの？

A：〇〇中学校。

T：中学校を卒業した後は、高校に行くこともできるし、就職することもできるよ。将来就きたい職業はある？

A：まだ決めてない。

T：そうか。でも、中学校を卒業した後はどうするの？

A：とりあえず、高校に行くかな？

T：高校生になりたいんだね。じゃあ、Aさんが高校生になれるように、先生がアドバイスをやるね。高校生になるためには、受験があるのは知っているよね？

A：うん。

T：高校受験のとき、Aさんが高校生になったらどれだけ頑張って学校に来てくれるか見極めるために、Aさんが行きたい高校は、きっとAさんの登校日数や欠席日数を確認すると思うよ。それに、高校生になったら、進級したり卒業したりするためには、テストの点数ばかりではなく、出席日数もとても大事なんだよ。欠席が多くて、出席日数が足りないと、もう一度同じ学年をやり直したり、卒業できなかつたりすることもあるよ。だから、高校生になるためにも、今から頑張って学校に登校し続けることは、Aさんにとって、とても大事なことだと思うんだけど、どう思う？

A：学校を休まない方がいいと思う。

不登校によって、自分の進路が狭められる可能性があることに言及したことで、不登校になるとならないとでは大きな違いがあるということを意識づけることができた。

③ 目標を設定させる。

自分が不登校であり、このままでは不利益が生じることを理解させたうえで、自分の意思で目標を設定させた。

〈10月28日（火）会話記録〉

T：先生は、Aさんが登校してきてくれた日は、毎朝、嬉しい気持ちになるよ。でも、これからのことを考えると、今年は昨年より欠席日数を減らした方がいいと思うんだけど、どうかな？

A：いいと思う。

T：じゃあ、せっかくだから、今日、目標を決めようか。少なくとも昨年の45日より少ないといいね。何日にする？

A：30日にならないようにする・・・かな？

T：できそう？

A：・・・たぶん。(笑顔)

T：じゃあ、頑張ることにしたんだね。嬉しいです。先生も協力します。

自分のこれまでの欠席状況を知り、不登校の定義を知ったことで、A児は不登校解消となる数字を目標として設定したと考えられる。担任が一方向的に目標を提示するのではなく、本人の意思を尊重したことで、A児が自分で目標を設定し、担任と共有することができた。また、A児が自分で目標を設定したという事実は、担任が母親にも伝えた。

(2) 選択肢を与える。(11月)

目標を設定した翌週、放課後にA児が、「一回学校に来て、途中で帰っても、学校に来たことになるの？」と質問してきた。そこで、以下の点について、確認した。

- ・途中から学校に来た場合は、「遅刻」となるが、登校したことになる。
- ・途中で帰った場合は、「早退」となるが、登校したことになる。
- ・途中から学校に来て、途中で帰った場合は、「遅刻・早退」となるが、登校したことになる。

どのような形態でも、学校に来ることができれば「登校」になるということをA児は知らなかった。そのため、出席するためには、このような登校形態をとることも選択肢の一つであることをA児に教えた。

すると、翌週、母親から、「今日は皮膚科に行くので、早退します。給食後、下校させてください。」という連絡帳をいただいた。これまで、皮膚科や整形外科等、通院の用事が済めば登校できる状況であっても丸一日欠席させたり、登校時刻に体調が悪ければ、日中に体調が回復しても丸一日欠席させたりすることが多かった母親が、「早退」という選択をしたのは大きな変化であった。A児が自分で目標を設定したことが母親に伝わり、「部分的な登校」を親子の意思で決定したことが分かる。

この日以降、3月まで、「通院による早退」は5日あった。また、体調不良のために、「途中から登校した遅刻」は18日、普通登校しなかったが、「昼休みに顔を見せに登校した遅刻・早退」が3日、「放課後に顔を見せに登校した遅刻」が3日あった。A児が登校時刻に体調不良を訴えれば欠席させることが多かった母親は、登校時刻に間に合わなくても、A児を連れて遅れて登校させるなど、登校に対して協力的になった。5ヶ月間で合計29日の遅刻や早退は多いと言えるが、5年生の前期までであれば、これらの日はすべて欠席したであろう。そう考えると、明らかに登校形態が多様になっており、目標設定をした本人はもちろん、A児の目標を知った母親にも意識の変容が見られたと捉えることができる。

(3) 本人の不安を取り除く。(1月)

当校の5年生では、例年1月下旬にスキー教室を実施している。1泊2日の5年生最大の宿泊的行事である。しかし、A児は5年生のこれまで、マラソン大会、親子活動、市の陸上大会等、様々な行事の日に欠席してきた。4年生の頃までと同様、苦手な活動や初めて経験する活動、保護者の協力が必要な活動に参加することができていなかったのである。A児の姉も兄も小学校5年生の時にスキー教室は参加しておらず、A児やその家庭にとって、宿泊を伴うスキー教室が大きな壁になっていた。実際に冬休み明けからは、欠席が1日、遅刻が4日あり、スキー教室への不安を取り除くことが年間欠席日数に大きく影響すると考えられた。そこで、スキー教室の直前に担任がA児と面談を行った。

〈1月15日(木) 会話記録〉

T：最近、体調を崩してなかなか学校に来られない日が多いけど、スキー教室のことが関係しているかな？緊張している？

A：している。

T：不安はある？

A：ある。

T：先生はAさんとスキー教室に行きたい。でも、どうしても緊張する、不安がある、具合が悪い、起きられないというのなら、行けなくても仕方がないよ。ただ、今までせっかく頑張ってきたんだから、とにかく当日は学校において。スキー教室には行かないで、学校に登校して職員室で自習をすることにしてもいいよ。参加や登校の仕方はAさんが決めていいから、とにかく登校することは頑張してほしいです。約束できる？

A：(うなづく)

T：先生たちが下見に行ったときの写真を教室に掲示したけど、特別にAさんに1部あげるね(写真2)。何か心配なことや聞きたいことがあったら、いつでも言ってね。(スキー教室に参加せずに登校する場合の自習課題も提示する。)

この後もA児は遅刻をすることが多かったが、この日を境に、「スキー、滑られないかもしれない」、「朝、みんなと一緒に起きられないかもしれない」、「みんなと同じ部屋で寝られるかな」等、具体的な不安を口にするようになった。スキー教室当日の登校の仕方を選択肢を与えたり、スキー教室への不安を取り除き、見通しをもたせたりしたことで、A児は、不参加から参加へと意識を変容し始めたと思える。

結局、当日は遅刻することなく登校し、スキー教室の全日程を消化した。出発の際には表情が硬く、初めてのスキーの最中は弱音を吐く場面が多かったが、最後は笑顔も見られた。行事後の作文には、スキー教室に参加することができた充実感と自信が表れていた。



写真2 スキー教室の下見で撮影した写真

〈スキー教室後の作文〉

初めてスキーをしてきん張したけど、上手にすべることができたのでうれしかったです。(中略)このスキー教室で、あきらめなければできるといことが分かりました。友達と協力してスキーをしたので楽しかったし、生活班の人とも仲良く過ごせたのでよかったですと思います。

(4) 登校状況を可視化する。(11～3月)

① 昨年度の欠席日数を確認させ、月単位で目標を設定させる。(11～3月)

11月以降は毎月初めに、昨年度の月別欠席日数を本人に知らせた。昨年度の同じ月で何日欠席したか確認し、今月の欠席日数を何日までにするか、A児本人が目標を設定できるようにしたのである。11月以降の5ヶ月のうち、4ヶ月は昨年度の欠席日数を下回ることができた(表2)。これは、A児が自分のこれまでの実態を把握し、自分の意思で月単位の目標を設定した成果である。また、月末には前年度と今年度の欠席日数を比較させ、改善したことを自覚させたことで、自信を与えるとともに、翌月の目標設定への意欲を高めることができたと思える。

表2 A児の月別欠席日数の比較

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
4年	2	3	3	0	0	11	7	5	4	4	5	1	45
5年	0	2	3	1	0	8	3	3	3	1	3	2	29

② カードを活用する。(2～3月)

1月末までで欠席日数は24日で、「年間欠席日数30日未満」という目標の達成が現実味を帯びてきた2月から、目標を意識して登校できるように、カードによる取組を行った(写真3)。

まず、「年間欠席日数30日未満」という目標を再確認し、そのための方策をA児に考えさせ、カードに記入させた。A児は、就寝時刻や起床時刻、朝起きられなかったり、体調が悪かったりした場合の対応について、具体的な方策を自分で考え、担任と共有した。また、出席した日は毎日カードにシールを貼らせたことで、A児が、残りの授業日数とこれまでの欠席日数を比較することができた。「授業日数があと○日あって、あと△日登校すれば、目標を達成することができる」という担任からの働きかけにより、A児に見通しをもたせ、目標達成が実現可能なことを認識させることができたと思える。その成果もあり、最終的に年間欠席日数は29日となり、ぎりぎりではあるものの、目標を達成することができた。

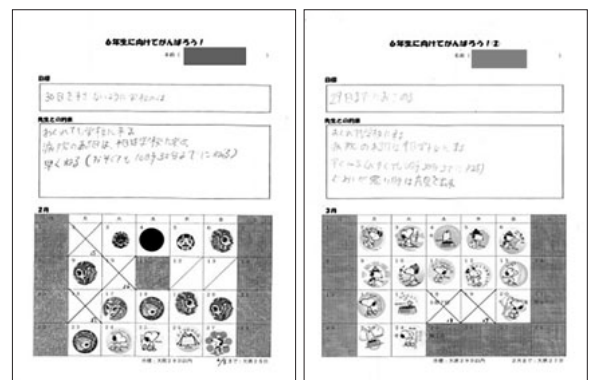


写真3 カードによる取組

5 全体のまとめと成果

前年度よりも年間欠席日数を16日も減らし、合計29日にする事ができ、不登校を解消することができた(表3)。

後期の初めに本人と面談を実施した10月以降を見ると、前年度の欠席日数が26日だったのに対し、15日となり、大幅に改善した。不登校ではない年度は、1年生以来4年ぶりとなり、また、前年度の欠席日数を下回ることができたのは、小学校生活で初めてであった。5年生の最終登校日に、不登校の解消が確定し、目標を達成できたことを称賛すると、A児は笑顔で、「来年は（年間欠席日数を）15日くらいにする。」と、新たな目標を口にした。自分で設定した目標を達成したことが大きな自信となった発言である。

表3 A児の5年生時における出席状況

授業日数	出席停止・ 忌引等の日数	出席しなければ ならない日数	欠席日数	出席日数	備考
203	2	201	29	172	通院10日、発熱7日、体調不良5日、 腹痛3日、風邪1日、悪心1日、 怪我1日、事故欠1日

A児の不登校が解消したのは、本人が自分の意思で目標を設定したことが最大の要因である。前年度までの欠席日数を知らせ、自分が不登校児童であることを自覚させたり、不登校がもたらす影響についても言及したりしたことが、本人の目標設定へとつながった。また、目標を設定したままではなく、昨年度の月別欠席日数との比較、残りの授業日数と現在の欠席日数との比較により、目標を意識した生活を3月まで送らせることができたことが有効であった。

さらに、A児の中で「部分登校」という選択肢が生まれたことも、出席日数の増加につながった。これは、A児が自分で設定した目標を意識して生活するようになったことで、母親の意識が変容したことも要因となっている。A児が自分で目標を設定した事実を母親にも伝えたことで、母親がA児の出席状況に関心をもつようになった。遅刻になってもA児を連れて登校させたり、通院日は欠席ではなく「早退」を選択し、学校に迎えに来たりするなど、母親がA児の出席に協力するようになった。

翌年度は、9月現在、気管支炎による入院を除けば、毎日登校している。2泊3日の宿泊的行事にも参加した。登山や宿泊等、負担の大きい行事であったが、昨年度のスキー教室前のような不安を見せることはなかった。また、昨年度参加できなかった市の陸上大会にも参加することができ、5年時の成功体験が翌年度にもつながったと考える。A児の家庭にも変化が見られ、A児の継続的な登校に触発され、不登校であった中学生の兄も部分登校できるようになった。

6 今後の課題

本研究では、不登校児童であるA児に自己理解を促し、目標を自己決定させることで、A児がどのように変容するかを検証した。その結果、不登校を解消することができた。欠席日数を減らしたということだけではなく、A児が自分で目標を設定し、その目標を意識して生活を送り、自分の目標を達成することができたという点が大きな成果である。しかし、年間で早退は9日、遅刻は25日もあり、学校にいない時間は依然として長い。小学校卒業後のことも見据えた場合、6年生でも継続した登校を促し、中学校との引き継ぎを綿密に行うことが求められる。

今回のケースでは、家庭環境が厳しく、母親からの協力を得ることが難しいと考え、不登校児童本人への働きかけを支援の中心に据えた。本人と直接面談を行うことができる場合は、この働きかけは有効である。しかし、本人との面談が難しい場合には、今回のような働きかけが必ずしも有効とは限らない。そのようなケースがあることも見据えて、家庭環境が厳しい保護者にどのように働きかけるかという視点も、今後は考えていきたい。さらに、今後は、「学校が楽しい」、「授業が分かる」等、登校することで得られる利益を本人に感じ取らせ、社会性や自己有用感を育みたい。

7 引用・参考文献

- ・高橋雅彦「不登校児童を継続的に登校させるための取組－メンタルフレンド的な視点に基づく関わり方とルール・体制づくりを軸にした実践を通して－」教育実践研究第19集，2009年，pp177-182.
- ・新潟県教育委員会「平成26年度学校基本調査（速報）」，2014年.
- ・三浦光哉『『本人参加型会議』で不登校は改善する！教室復帰に向けた特別支援教育からのアプローチ』学研教育出版，2014年.
- ・文部科学省「平成26年度学校基本調査（速報）」，2014年.